

人々を結びつけた緑のパワー

阪神・淡路大震災後の活動を振り返って

中瀬 勲
Written by Isao Nakase

活動を振り返って

参画と協働 阪神・淡路大震災から一年余が経過した一九九六年二月六日、「第一回ランドスケープ復興支援会議」（略称「阪神グリーンネット」）が神戸市・三宮のビルの一室で開催された。予算も組織も何もない状況であったが、民間会社の好意で会議室をお借りして開催することができた。会議室を埋め尽くした数十人の被災地内外からの参加者が、復興にどのように貢献できるかについて、様々な立場から熱い議論を交わしていたことを鮮明に記憶している。今から思うと『参画と協働』のはじまりであったといえる。

緩やかな連携 そこには震災直後から、花や緑を通じて活動してきた組織のメンバーに加えて、自分たちの地域を花や緑で復興したいと主張する主婦や高齢者、何か貢献できないだろうかと考えている学生、今、自分たちが持っている技術で、これまで以上に貢献しようとする緑の専門家、愛好家、公務員などがいた。

設立に参加した組織は、各地のまちづくり協議会、ドングリネット神戸、復興支援グループ「ガレキに花を咲かせよう」、コープグリーンネット、シンクタンク・ユイ、兵庫県立人と自然の博物館グループなどであった。

この会議で、これまで活動していた、あるいはこれから活動しようとする様々な個人や組織が、「緩やかに連携した組織」としての「阪神グリーンネット」が立ち上がり、その後の展開へと繋がっていくこ

とになった。活動の目的は、①草花の苗の配布や押しかけ緑化などの実践的活動、②緑のまちづくりに関するアドバイス活動、③他の専門的なグループや市民との連携・協力であった。最盛期には、メンバーは一〇〇名を超えていた。

花緑を通じた多様な活動 設立当初の活動を辿ってみると以下のようである（辻信一氏「環境緑地設計」の資料による）。

「二月六日」第一回ランドスケープ復興支援会議開催（神戸市三宮）、「二月四日」第一回苗配布（パンジー約二万六千鉢・提供角田ナーセリー、三田市）、「人と自然の博物館」、「三月一日」第二回ランドスケープ復興支援会議（神戸市三宮）、「三月二六日」第三回ランドスケープ復興支援会議（神戸市三宮）、「三月二九〜三〇日」花文字「ガレキに花を」づくり（三田市）、「人と自然の博物館」、「三月三一日」ヒマワリの種蒔き（神戸市岡本一〜八丁目）、「三月」生け垣啓発パンフレット「あなたの家の垣根からはじめよう 安心な環境づくり」増刷、「四月三〜七日」第一回苗配布・花壇づくり（ヘデラ、イチゴ、スターティス他約一万七千四百鉢・提供ベルディ、小林温室、みたけの里舎）、「四月六日」住宅地緑化モデル活動のための現地調査、生け垣プランターの設置（神戸市灘区楠丘一帯）、「四月九日」第四回ランドスケープ復興支援会議（神戸市三宮）、「四月二一日〜五月二六日」野菜畑づくり（三田市）、「人と自然の博物館」、種蒔き、間引きなど…種子提供、タキイ種苗）、「四月二五日」第五回ランドスケープ復興支援会議（神戸市三宮）、「五月三〜四日」仮設住宅で花壇づくり

(神戸市ポトアイランド)などを経て、第二回阪神・淡路ルネッサンス・フアンド(HAR基金)公開審査会参加・助成金決定、ワークショップ勉強会、第四回苗配布(キバタレンギョウ)提供沖縄県緑化種苗協同組合、神戸市深江地区緑化まちづくり支援、魚崎南住宅ひめりんくらぶ、兵庫県から第五回さわやか街づくり賞(まちづくり活動部門)...

このような様々な活動を展開してきたが、植物を植えるための土を持っていったとき、「土は重くて運びにくいのでありがたい」とお礼を言ってくれた高齢者の方の言葉は、今も記憶に残っている。

組織づくりの実践的学習

これまでの活動を振り返ると、意識はしていなかったが組織づくりの実践的学習をしてきたのではないかと思われる。①「独自で」、②「集合して、連携して」、そして③「再び独自で、独立して」活動する時期に分けられるようである。

独自で 震災後一年間程度は、各個人や組織は地域密着、あるいは各々のテーマに基づいて、独自で活動“していた。「各地のまちづくり協議会への支援」「ガレキに花を」「仮設住宅での野菜畑づくり」「 Downing ネット神戸」などの諸活動であった。これらの組織が呼びかけ役として、一九九六年二月六日に「阪神グリーンネット」の設立になったのであるが、実に様々な方が集まることになった。例えば、「この会に参加すると広場に植える樹木がもらえる！」と聞いて参加したという主婦の方もおられ、現実に樹木を手入れることができたというエピソードもあった。

集合して、連携して 「阪神グリーンネット」の活動は、組織づくりの実践的学習であったといえる。ワークショップの進め方を学習し、会得し、現場で花緑を通じて展開することができた。この活動を経験して、会社から独立してしまったメンバーもいるほどである。先に述べた、緩やかな連携“は、①誰もが参加しやすい、②地域から信頼が得られ、活動しやすい、そして重要なことは③活動資金を得やすいこと

であったといえる。「阪神グリーンネット」は、パートタイムで個人や組織が集合して、連携できる『絆』であるともいえるのではないだろうか。

再び独自で、独立して まもなく活動が九年を迎えるのであるが、新たな組織で独立したり、独立して、再び独自で活動をはじめたりする時期にきているようである。しかし、この背景には、緩やかな連携“にいつでも戻ることができるという安心感がメンバーにあることはいうまでもない。

貫いた思想

活動の成果として、ヒマワリの種蒔きや草花の苗配布、学校ピオトープづくり、松本地区、新長田地区など各地でのまちづくりやせせらぎづくり支援、平磯のピオトープづくり、深江駅前花苑づくり、移動生け垣の試作と設置などがある。わずかばかりであるが、被災地の花・緑環境の整備、復興に貢献できたのではないだろうか。

そして、最近になって気づいたことであるが、まちづくりや花緑づくりを意図する組織づくりへの支援にもなっていたのではないだろうか。「参画と協働」を現場で実践する住民組織が成長し、活動をはじめていったといえる。

これらの諸活動の背景には、現場で学び実践する現場主義、人と人、人と自然の共生の思想があったといえる。

中瀬 勲 (なかせ-いさお)

兵庫県立大学自然・環境科学研究
所教授、兵庫県立人と自然の博物
館副館長、農学博士。1948年大阪
府生まれ。70年大阪府立大学農学
部卒業、72年同大学院農学研究
科修士課程修了。90年同大学助手、
講師、助教授を経て現職。著・訳書は
『景観計画』(共訳・鹿島出版会)、
『山河計画』(共著・思考社)、『都
市デザインの手法』(共著・学芸出
版社)、『アメリカン・ランドスケープ
の思想』(鹿島出版会)、『緑のコミ
ュニティデザイン』(学芸出版社)など。

CEL